

MACF 礼拝説教要旨

2020.05.03

「宗教家たちの高慢」

ローマの信徒への手紙 2 章 6 節～16 節

2:6 神はおのおのの行いに従ってお報いになります。

2:7 すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、

2:8 反抗心からかれ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。

2:9 すべて悪を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、

2:10 すべて善を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。

2:11 神は人を分け隔てなさいません。

2:12 律法を知らないで罪を犯した者は皆、この律法と関係なく滅び、また、律法の下にあって罪を犯した者は皆、律法によって裁かれます。

2:13 律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされるからです。

2:14 たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。

2:15 こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。

2:16 そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう。

+++++

1) 神の報い

当時のユダヤ人指導者たちの中には自分たちに与えられた神の律法こそ世界の基準であり、それを持たない民族はいわば三流であり、存在の意味も価値もないのだと考えていた人たちがあったようです。

神を知らない人たちがいくら道徳的に良いと思うことを実行しても、何の価値もなく、神はそういう世でいう「善行」などまったく評価しないのだと彼らは考えていました。

同時に、自分たちは神の律法があるので、世の指導者たちの定めた憲法などには従わなくても良いのだとさえ思っている人たちも存在していました。もちろん、これは言葉では表明できませんでしたが、そんなことをすればローマに逆らうものとして殺されてしまいますから、心の中では「自分たちは神にこそ従うのであって、世の指導者たちの決めた法律など無視して良いのだ」と考えている人たちもいたようです。

パウロはこの感覚、考えを否定しています。

「ユダヤ人にもギリシャ人にも」という言葉は「神に知られている人にも、理知的な人にも」という意味もあるでしょうし「すべての人」という意味もあります。

つまり、パウロは神の律法を持たなくても、その地域、その国の「人々の命を守り、社会、隣人に対する善を行うなら」それは神からの報いを受けるのだと語っています。

それによって良い行いを完全に実行し続けることができれば永遠の命に至るのかもしれませんが、実際にはそれは無理なこと。ですから、断片的な良い行いを積み重ねることで「救いを与えられる」という意味ではありません。でも、いわゆる善行は決して軽んぜられてはならず、神からの報いの対象として理解されるべきものだとパウロは語るのです。

つまり、聖書にある「律法」を受け、学び、それに沿って生きている人もあれば、この律法は知らないけれど良心に基づいて人道的な善意に溢れた生活をするなら、神からの恵み、祝福を受けるのだということです。

「自分自身が律法」という表現が用いられていますが、これは個々人に与えられている「良心」と呼ばれるものと考えられるでしょう。

それはまさに律法の要求を受け止める場であり、それを理解してその方向に進ませようというエネルギーでもあります。

ただ、私たちの良心は「その地域や国の教育」の結果、歪められたり、間違っただけをしていないのに気づかないということも、ありますので決して、その判断がいつでもただしいわけではありません。にもかかわらず、その良心の声に聞き従って行動している人たちの他者に対する善意は神からの評価を得るのだとパウロはいいます。

## 2) 人は自分の撒いたものを刈り取ることになる

パウロは律法に関して言えば、知っていることも大切だけれど、それを実行することにこそ意味があると語ります。

いくら聖書の教えを知っていても、それに向かって実行するつもりがなければ、それは「いわば「空念仏」であり、意味のないものです。

というより、知っているのに実行しないわけですから、神の裁きの対象にさえなり得ます。

パウロの論法では「律法をいくら実行しようとしても、私たちは満点を取れないので、律法によっては、神の心を満足させることはできないということを示そうとしているので、厳しい言葉が書かれていますが、冷静に考えれば考えるほど、「知らないで良いことをしなかった」という人より知っているのに良いことをしなかった人のほうが罪は重いことになるということを示そうとしています。

また、あとで出てきますが、私たちは良い行いを実行することだけを頼りにしても「神の永遠の救い」を得ることはできません。

イエス様によって開かれた別の道があるのです。

でも、当時の宗教家たち、指導者たちの心には異邦人に対する軽蔑と、自分たちが神から律法を受け取ったという選民意識による高慢さが溢れていて、それとは別のところに神の救いの道は示されたのだということを理解することもできなかつたし、理解しようともしていませんでした。

この箇所では、ギリシャ人もユダヤ人も人間として「生きる価値があり、良い行いには、それぞれ神からの報いがある。」ということ覚えておく必要があるのだと思います。

ですから、それぞれの生活の中で一生懸命、他者を励まし、愛し合いながら生きている人、その人がどこの国の人であっても、どの宗教の人であっても神は、それらの人たちの良い行いを「評価し、報いを与えてくださる」ということを否定してはならないのだと思います。神は、すべての人の神です。

そして、特に真理を知っていると自負している人たちの、異邦人に対する高慢、軽蔑について、パウロは戒めています。

さらに「律法を知っているのに、それを実行しないで平気で生きているあなたには、深刻な問題がある」と指摘し、その悪に気づくように「悔い改め」を求めているのです。

もちろん「良い行い」と言っても本当のところ、何が良い行いで、何が悪い行いなのか、わかりにくいところがありますが、神は私たちの心の内側を知っておられるので、促されるままに良いわざに励みたいと思います。

#### ガラテヤの信徒への手紙 6 章

6:7 思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。

人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。

6:8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。

6:9 たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取るようになります。

6:10 ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

パウロはより具体的にその問題を指摘して、さらに言葉を続けています。

それこそ具の音も出ないような説得力に富んでいます。

パウロ自身の悩みだったかもしれませんが、また、ユダヤ人というところにキリスト者、割礼のところに「洗礼」を入れて読んでも良いのかもしれませんが。

2:17 ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、  
2:18 その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。  
2:19-20 また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています。

2:21 それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか。  
2:22 「姦淫するな」と言いながら、姦淫を行うのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿を荒らすのですか。  
2:23 あなたは律法を誇りとしながら、律法を破って神を侮っている。  
2:24 「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」と書いてあるとおりです。  
2:25 あなたが受けた割礼も、律法を守ればこそ意味があり、律法を破れば、それは割礼を受けていないのと同じです。  
2:26 だから、割礼を受けていない者が、律法の要求を実行すれば、割礼を受けていなくても、受けた者と見なされるのではないですか。  
2:27 そして、体に割礼を受けていなくても律法を守る者が、あなたを裁くでしょう。あなたは律法の文字を所有し、割礼を受けていながら、律法を破っているのですから。  
2:28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。  
2:29 内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです。

これは、今、私たちが心にしっかり受け止めなければならない内容です。この文章からユダヤ人を軽蔑してはなりません。私たちも同じ状況に生きているかもしれないからです。

主よ、私たちが高慢にならず、他者を軽蔑せず、知っているのに実行しない罪、律法を知らない人たちの善行を軽蔑することがありませんように。

聖書は読んでいる、洗礼も受けた、教会にも出席し、献金もしている、でも、神の心に気づいていない、神の期待に応えようとしない、神の向いている方向を向こうとしない、でも、宗教的優越感だけは持っている。主によって、促しを与えられ、自分の足りなさに気づきを与えていただきましょう。生活の土台の部分を見直して、何を誇りに生きているか考えてみましょう。家柄、所属宗教、単なる善行の積み重ねによる「救い」はありません。あなたは、どこにいるのか。どこに立っているのか。何を考え、何を見ているのか。今、問われています。